

第 47 回インナーゼミナール大会

研究計画書

ゼミ名	奥田ゼミ II	チーム名	Laissez-faire's
タイトル	『ヨーロッパ・アメリカ・日本における都市と農村に関する研究』		
テーマ群	f)歴史・思想		
メンバー			
研究計画内容	<p>アダム・スミスは『国富論』第三編第一章において、都市と農村は相互補完的關係にあり、都市が発展するためには農村が生活資料や原料の供給地として先行する必要がある、都市は農村の余剰生産物に対して市場を提供するということを強調している。農村が生活資料や原料を生産し、農村の余剰生産物、言い換えるならば耕作者の生活維持に必要な分を超える分のみが都市の生活資料になるので、都市は農村の余剰生産物の増加なくして発展できない。また土地の耕作は職人の助力なしでは発展しないので、社会における都市の発達と富の増進は、その国土つまり農村の改良と耕作の結果に比例した。したがって、スミスは農業、製造業、国内貿易、外国貿易という順序が「富裕になる自然な進路」だと主張している。実際、18世紀後半の北アメリカでは、職人が余剰生産物を得た場合には、それを未耕地の購入と耕作に投下して農場主になることが多く、その結果、着実な富の蓄積と急速な経済成長が可能になった。一方でヨーロッパにおいては外国貿易に主眼が置かれ、その「未裔」としての都市の商工業によって農村の改良がもたらされた。ヨーロッパ諸国の発展は北アメリカ植民地の場合と異なり、「事物の自然な成り行き」に反しているため、その速度は遅かった。</p> <p>このように都市と農村は補完的な関係にあり不可分であるが、アメリカとヨーロッパの「富裕になる進路」は全く逆であったといえる。そこで今回の研究では、日本における都市と農村はどちらの型であるのか、あるいはどちらでもないのかについて明らかにしたい。</p> <p>今回の研究を通じて、現代の東京一極集中状態である日本がどのように農村と関わり合い経済大国としての地位を築いたのかを理解し、今後さらに国内総生産を増やしていくにはどのようにすればよいのか、そのために地方はどのように関わっていけるのか模索する契機となることを期待する。</p>		